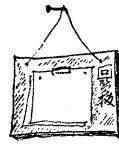


私の幼児教育論(二)



佐々木 正美

父親

児童精神科の診察室や地域療育機関の相談室で、毎週大勢の子どもやその家族の人たちと会っていて痛感することは、そういうところに連れて来られる子どもの多くが、親に対して十分な依存体験をする以前に、すなわちまず子どもの側の欲求が十分に満たされる以前に、親の側のいわば一方的な要求や期待をおしつけられているということである。

親とすれば、子どもを大変可愛く思い、その将来を真剣に考え

てやっているからだということになるのだが、私の目からすると、子どもの将来を「思いやっている」というよりも、「心配している」というふうに見えてしかたがない。

不幸にして先天的に心身障害をもって生まれて来た子どもの将来を、親が「心配する」のならば、よく理解ができるが、健全な状態で生まれてきた子どもに対して、いきなりその子どもの将来を心配しているように思えてしかたがないのである。

子どもの将来を心配する傾向は母親に強い。そして、そういう母子関係の場合の父親は、子どもの躾や教育をすっかり母親にまかせきりにしている。本来、まかせるといえるのは、相手を本当に信頼して何かを託すことなのだが、そういう場合の父親は、母親の育児や教育に必ずしも信頼しているというのではなくて、つい億劫だからということを手を出さないでいるか逃げています。

父親が子どもの躾や教育に積極的な姿勢を示してくれないと、母親に十分な自主的判断力が育っている場合であればいいのだが、子どもの父親である夫に多くの依存心をもっていて、主体的な価値観をもち合わせていない状態であると、母親自身が依存の対象を見失ったままで、潜在的な不安をうまく処理できず、ゆとりのない緊張した母子関係を持続して、過保護でむやみと干渉の多い育児をしてしまう。

子どもの側では、自分の要求が受容されるよりは、母親のゆとりのない一方的な要求をおしつけられて、干渉の過剰な養育をされ続けることになり、慢性的な欲求不満に陥ったきりになっていく。以前のように第一反抗期とか第二反抗期だとか呼ばれるような、いわば発達の節目がなくなつて、幼児期のはじめからずっと欲求不満の連続で、慢性的な反抗期を示したり、かと思つと母親の一方的な要求に屈服して、母親の機嫌がよくなることに自分の心の安らぎを感じたりする子どもが多い。いずれにしても、子どもは本當の自主性や自立心を育ててそこなつてしまふ。

今日のように、社会の中の価値観が多様化し混乱さえしている状況で、人々にそれぞれの責任感への意識が乏しく、権利意識の方が優先しがちな戦後民主主義ないし自由主義の風潮のために、人々は何か共通の利益関係でも結ばれない限り連帯しにくく、相互に孤立したままの生活を余儀なくされている現状であればあるほど、子どもの養育に関する父親の役割りは重要になると思われる。

今日は情報過多の時代だといわれる。そのことは情報を欲求している人や情報に左右されやすい人が多いということを意味する。すなわち主体性の乏しい人が多いということである。

家庭の中に精神的な支柱を立てるのは、父親の役割に帰すると

ころが多いと思う。そのことは、母親が自主的な育児をしやすくすることを意味し、子どもに自主性が培われることを意味している。

私は、子どもたちが幼児期の一時期、将来大きくなつたら自分の父親のようになりたいと思うことがあるといいと思つている。そのことが理想だとさえ考へている。

父親は何でも知つている。少くとも幼児期の子どもにはそう思える時期がある。「猫はどうして子どもにもお母さんにもひげが生えているの?」「式のやたらに多い」「どうして?」の質問にも答えてくれる。母親の買つてくれない大きな玩具を、誕生日などに買つてきてくれるのも父親である。大事なことだとすぐ母親は「お父さんと相談してから」と言うし、いたずらの度が過ぎると「お父さんに言いつけて叱つてもらうから」とも言う。母親の持てない大きな重い物を、父親は軽々と持ち上げて運んでしまう。

近所であつたとして、いざこざが持ちあがると、父親が叫びかけて行つて話し合いをして、かたをつけてくる。父親の休日には、ふだん母親とだけでは行きつけない遊園地や海や山へ連れて行つてもらえる。子どもの幼稚園のことも、母親は父親に相談のつてもらつてきめていく。平常はあまり子どもの行動に口出しはしないが、何かの時には厳しく叱られて、どこかに怖いところのある父

親。そんな父親を、母親はたしかに信頼しているらしい。

私は、幼児期の子どもが、このようなごく平凡で平均的な父親像を漠然とでいいから抱いてくれればよいと思っている。そしてたったこれだけのことはあるが、それなりに父親は努力が必要であるとも思っている。

そのなかでも、特に私が幼児期の子どもの養育で心がけたいと思っていることに、二つのことがある。その一つは、子どもに「どうして？」という質問に対して、できるだけいいねいに答えてやろうということである。「カブト虫の足はどうして六本あるの？」とか、「夏はどうして暑くて、冬はどうして寒いのか？」といったような疑問に対して、相手に理解が可能な答えかたをすることは容易でないことも多いが、そこに子どもを育てる妙味がある。自分で物を考える子ども、すなわち知的好奇心の豊かな子どもに育てるために、不可欠な対話のしかただと思っている。

そして、こういう対話は、できるだけ自然の教材や現象を媒介として行うのがよいとも思っている。そのためあって、私のところでは犬をはじめ、亀、やどかり、ざりがに、金魚その他の雑魚、かぶと虫やくわがた虫などの昆虫、その他安価な生きものばかりだが、沢山飼っている。ところがこの一年間に、これらの犬、くわがた虫、ざりがにが、それぞれ子どもを生んだのであ

る。こういう出来事は、それらを一緒に飼育している親子の関係を、うんと親密にするし、子どもたちに「どうして？」の類の質問を著しく多くし、図鑑などへの書物への関心を急速に飛躍的に深めることになる。

子どもたちは、自分で見たり観察して、図鑑やその他の本で自分でたしかめて、自分で父親や母親にも質問を発して、新しいことを知ること、創造的な喜びを見出しに行く。

二つめに心がけたいことは、できるだけ子どもと身体を動かして遊ぶことである。このことは、私がカナダのバンクーバーに見た童精神医学の勉強に行っていた時、現地の先生や同僚たちの親子の生活に学んだことである。当地の父親たちは、日本の父親のようには老けこんでいない。実に活気にあふれた調子で子どもと遊ぶ。母子の関係に比べて、父親と子どもの関係は時間が少ないが、実にエネルギーが豊富という印象を強くうけた。身体の動きは精神の活動そのものであると、彼らはよく表現した。幼児期から学童期にかけては、特にそのことがあてはまる。

私の家の周囲には、自転車で行ける距離に、自然を残した公園がいくつもあり、そのほかに山林に人工的な手を加えたフィールド・アスレチックもある。小学校一年生と幼稚園の年少組の二人の息子には、それぞれ自転車を与えて、時には二歳になったば

かりの三男も連れて、ちょっとしたサイクリングをしながらよく公園に出かける。子ども用のサッカーボールやバットやグローブを持ったりして、またとてもスポーツの恰好にはならない息子たちと、できるだけ公園や山林の中をかけまわることになっている。

身体がよく動くようになると、幼児期から学童期の子どもの精神機能も、生き生きとしてくる。それに自転車によって、自分ひとりで動きまわれる行動半径が拡大してくると、子どもの自我成熟や社会性の発達が、急速に進展してくるのがよくわかる。

遊 び

このようなことがらにも増して、私が幼児の教育に最も重要視することは、「遊び」の奨励である。このことはどれだけ強調しても強調しすぎることはない、常に自分自身に言いかけさせている。

毎週、私の診察室や相談室を訪ねてくる何十人という子どもたちの中には、勉強やお稽古事のよくできる子どもならいくらでもいるが、遊びの上手な子どもはおそらく皆無に近い。だから、幼児期から学童期の初めにかけての子どもが、毎日楽しく遊べていれば、情緒の発達や精神機能の基礎的な発達にはまず心配がない

とさえ思われる。

子どもは放っておいても上手に遊ぶことができる、多くの人々は考えている。確かにそのとおりであるが、この当たりまえのことが当たりまえでなくなっているのが、今日の子どもを取りまく家庭的・社会的状況というべきなのだろう。

子どもは放っておけば遊ぶのだが、放っておいてもできるようなことは、あまり価値がないと考えるような風潮が、戦後の社会にはできあがってしまった。そのことは、異常に過熱した進学競争や受験戦争と無関係ではない。そしてその試験をする側が、子どもたちの遊びの中で培われる真の主体性や創造性をテストすることをしないで、安易な機能的記憶術を試すような知識を求めすぎたことも、子どもから遊びを奪うことに拍車をかけることになったと思う。

子どもが遊べなくなった原因は、まだほかにもある。人口の都市集中現象で、人の住むところは、どこでも過密化してしまった。そのために子どもの遊び場としての広場がなくなってしまった。道路に自転車があふれて、裏通りまで安心して遊べる場ではなくなった。路地で石けりやゴムとびをするようなことはできなくなってしまった。それに遊び仲間も見つけにくくなってしまった。みんなお稽古事に行ったり、交通事故やその他の怪我などを心配

して、親が自分の目のとどかない戸外に子どもを出すことを嫌うようになったことや、家の中に十分な玩具があったり、テレビジョンがあったりして、戸外で仲間と遊ばなくても、退屈しないですむようになったからであろう。

けれども私は、子どもが自分ひとりであるいは兄弟たちとだけで、家の中のきままった出来合いの玩具で遊んでいても、それは子どもに眞の創造性や想像力を育て、社会性や主体的な自我の成熟をうながすことには、ほとんど無力であろうと思う。

子どもたちは、親の目から解放されたところで、仲間たちと協力し合い、自然の地形や条件に創意や工夫をこらしながら遊んでこそ、本当に遊んだということになるのだと思う。子どもの遊びは暇つぶしではない。生命や生活そのものであり、発達や成長に不可欠なことであり同時に、将来、眞に自主的で独創的な仕事をするための基礎となるはずである。

そのために親のなすべきことは、近所にできるだけ多くの同世代の仲間がいるところに居住すること、安心して遊ばせられる場所を見つけたら、つくってやったりすることであろう。

私は、子どもが四歳くらいになったら、少しずつ仲間たちと遊べるようにしてやりたいと思う。互いに独立し合った者どうしが、協調し合って遊びを創っていく。主体的な存在として、互い

が衝突して、けんかに発展することもある。しかし、けんかの不快さを体験したものでなければ、けんかを避ける方法を学習することはできない。遊びの中で仲間たちが創造的に協調性を身につけていく。なかには仲間の中でリーダーシップを発揮するものもあるし、いつもだれかの後に従ってばかりいる子どももいるであろうが、それぞれがそれだよと思う。社会性も主体的自我の発達も、こういう仲間との遊びをぬきにしては、あまり、期待できないと思う。

何人もの仲間や、親が目も離していても安心していられるような遊び場がない環境では、友だちの家に遊びに行ったり、親どうしが交代で子どもたちの遊びを見守るようにすればよいと思う。自分の親の目の届くところでしか生活や遊びをしない子どもは、子ども自身が遊びに意欲的・主体的に取り組みにくい。親自身の生活の目標が子どもに投射されすぎて、子どもは目的意識のない生活を繰り返すことに馴れてしまう。

密着しすぎた母子関係の弊害と、疎遠すぎる父子関係の弊害が、今日の児童の精神衛生に関する問題の主要な部分を占めている。

—— つづく ——

小児療育相談センター
東京女子医科大学小児科